

学 校 名	令和7年度 山形市立鈴川小学校 山形市鈴川町三丁目7番10号 TEL 6 2 2 - 2 1 5 8 FAX 6 3 3 - 9 5 7 1	校 長	鈴木 伸治
		研究主任	横山 洸
研 究 主 題	「気づき、考え、働きかけ、受けとめる」子どもの育成（第三次） —自分の思いや考えを表現し「ともに、暮らしをつくる」—		
研 究 主 題 設 定 の 理 由 と 目 標	子どもたちが人生を歩む上で様々な問題場面に出会う。それらの問題を解決するために、問題を正確に把握し（気づき）自分事としてめあて（課題）をもって問題解決に挑む主体的な態度（考え）が必要であると考え。さらに、自分一人では到底解決できない問題は、専門家や仲間と解決しようとする協働的な態度（働きかけ）も必要だろう。そして、自分なりに振り返り、その問題解決の方法や最適解を修正・更新（受け止め）し、暮らしをつくる人になってほしいと願っている。 昨年度の研究のまとめにおいて、自分の思いや考えを表現したくなる授業づくりが鈴川小学校の子どもたちの成長のために必要であると話し合われた。そのような授業の実現のためには、主に「言語化（思考を整理、広げるため）」「実体験（生活と学びをつなげるため）」「視覚化（互いの考えを共有するため）」3つの視点を大切にする必要があるのではないかという考えがでた。これら3つは、独立したものではなく、繋がり、関わっていくものとする。 それらをふまえ、今年の研究は、「言語化、実体験、視覚化」の3つの視点で「自分の思いや考えを表現したくなる授業づくり」を行い、「気づき、考え、働きかけ、受けとめる」子どもを育成していく。そして、それら3つの視点でつくった授業における「子どもの姿」を見取り、「その子どもの姿を引き出した手立て」について話し合い、考えを広げていく。このことは、令和の日本型教育に示されている「個別最適な学び・協働的な学び」にもつながるとともに、自己調整力を養うこともできる。 これらの研究を通して、令和の日本型学校教育の充実を推進し、「気づき・考え・働きかけ・受け止める」子どもの育成を目指して校内研究を進めていく。そして、全ての子どもを「ともに、暮らしをつくる子ども」に育てていきたい。		
研	研究の内容 1 子ども主体の学びの研究をする ・子どもは有能な学習者にとらえ→自ら学ぶ→学習者中心に授業を作る		

研究 の 内 容 及 び 方 法	・具体的な姿を通して実践研究を積み上げていく。 ・子どもの姿をもとにした事後研究会とする。 2 職員の協働研究を大切にする ① 学年での事前研究・研究授業・事後研究を推進する。 ② 授業者とその学級の児童の姿から学ぶ意識をもつ ・参観者は、学習活動案・研究授業・事後研究会で、授業者と児童の姿から成果を見出し、日頃の実践に活かすようにする。授業者は、授業後と事後研究会後で、省察した自分の成果や課題を子どもの姿から見出し、日頃の実践で活かしたり解決したりする。 ③ 学校生活全ての活動を校内研究の考え方で実践していく。 3 令和の日本型学校教育への移行 ① 能動的な学習の文脈（主体的・対話的で深い学び）を意識した単元づくり。 ② 一人一人に応じた学習の文脈（個別最適な学びと協働的な学び）を大切にして個別最適な学び・指導の個別化・学習の個性化を探究していく。 学習の流れ ① 情報の受信（インプット） → 情報を主体的に受信したくなる課題設定、課題解決へ向かう（実体験） ② 情報の発信（アウトプット） → 表出することで自覚化、異なる多様な他者の情報の分析（言語化・視覚化） ③ 情報の再構築 → 再思考・更新・修正・一般化・概念化 まとめでふり返りを大切にしていく（言語化・視覚化） ・各教科等の「見方・考え方」を働かせた深い学びについて、まとめることができる ・児童が学習のまとめやふり返りを自らの言葉や文字で表現できるようにする。 （振り返り→気づき→課題設定→情報収集）統合化メタ認知 学習の構造化・連続性・日々の暮らしへ
---	---